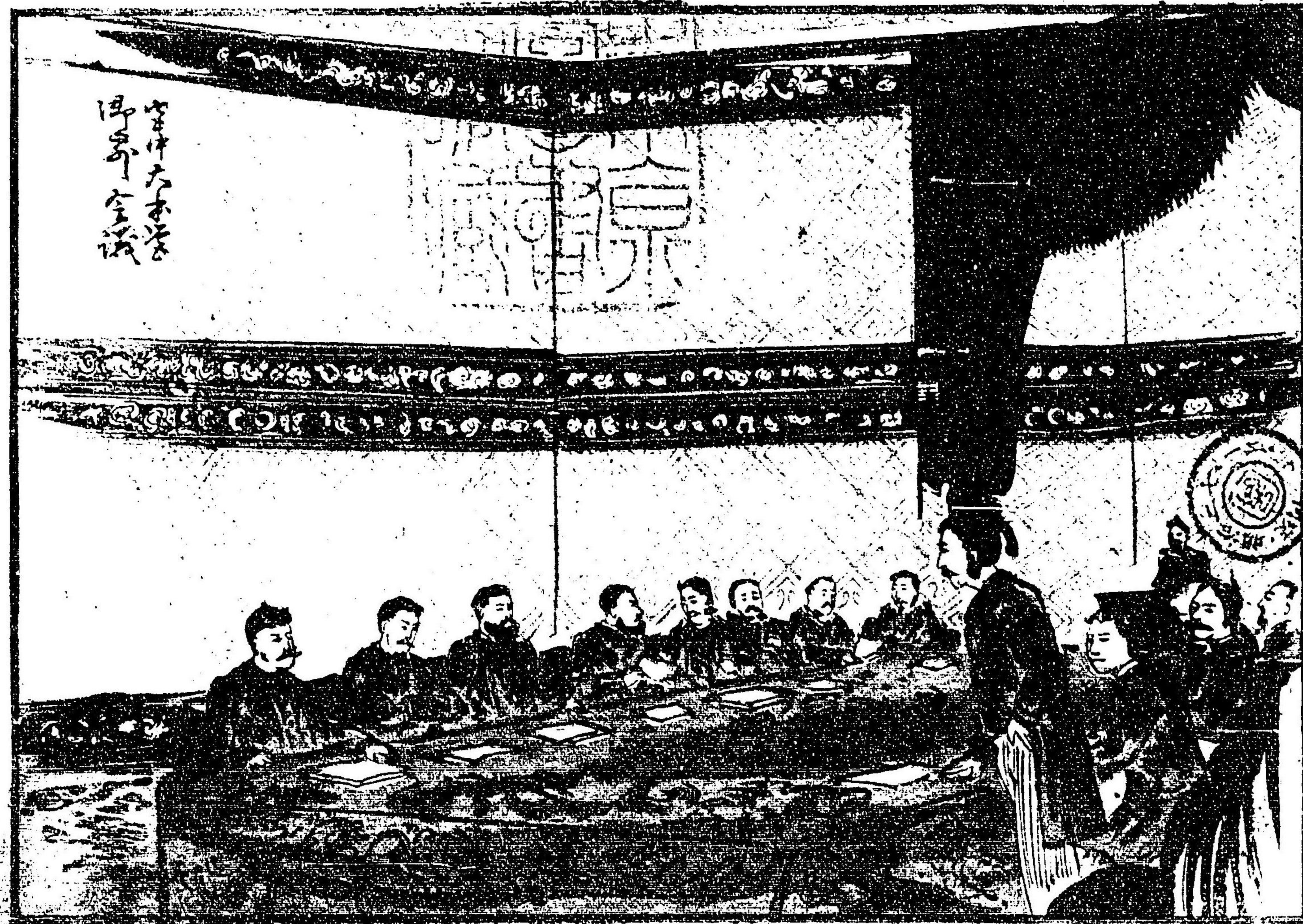


6
2
276

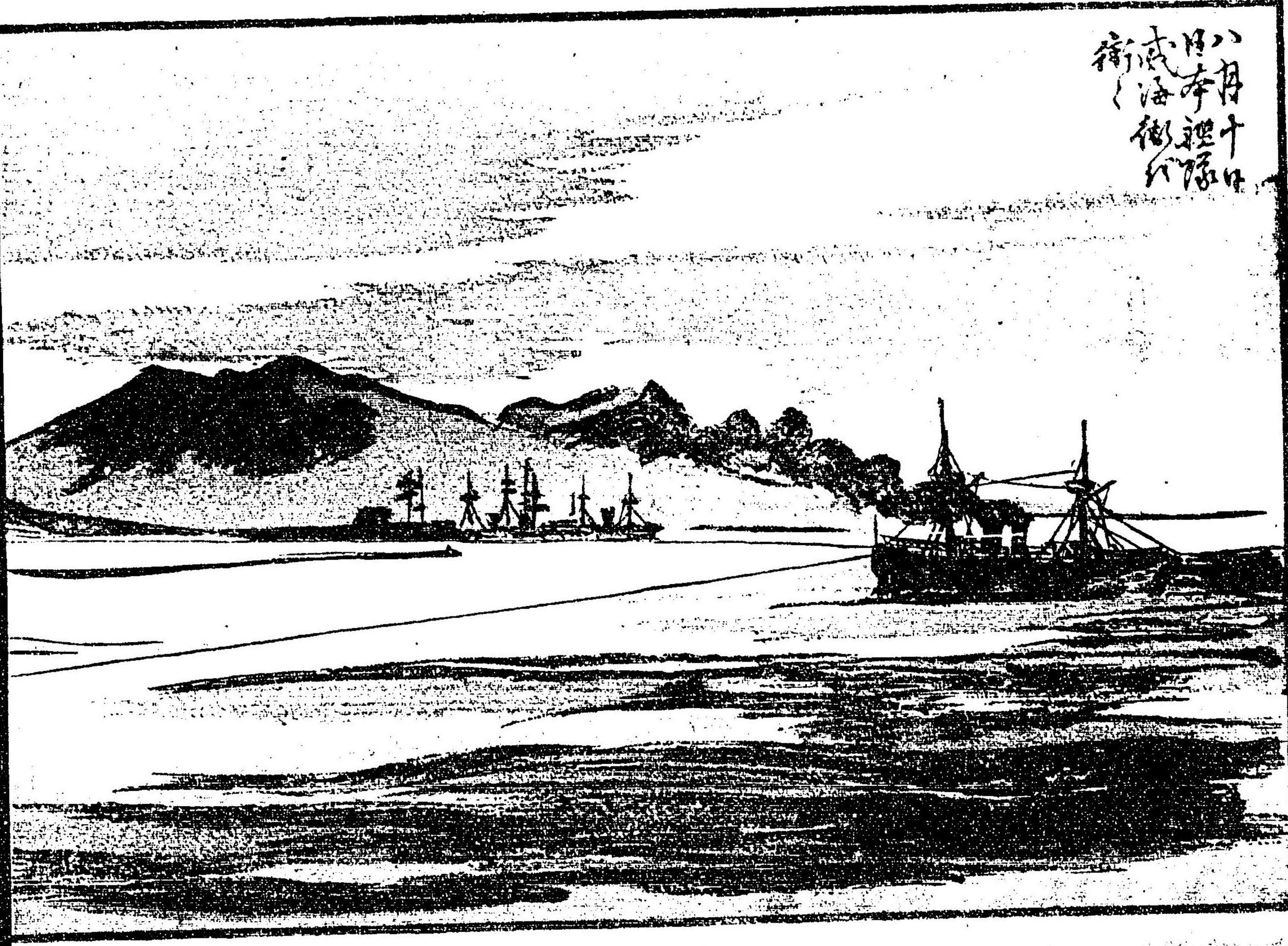
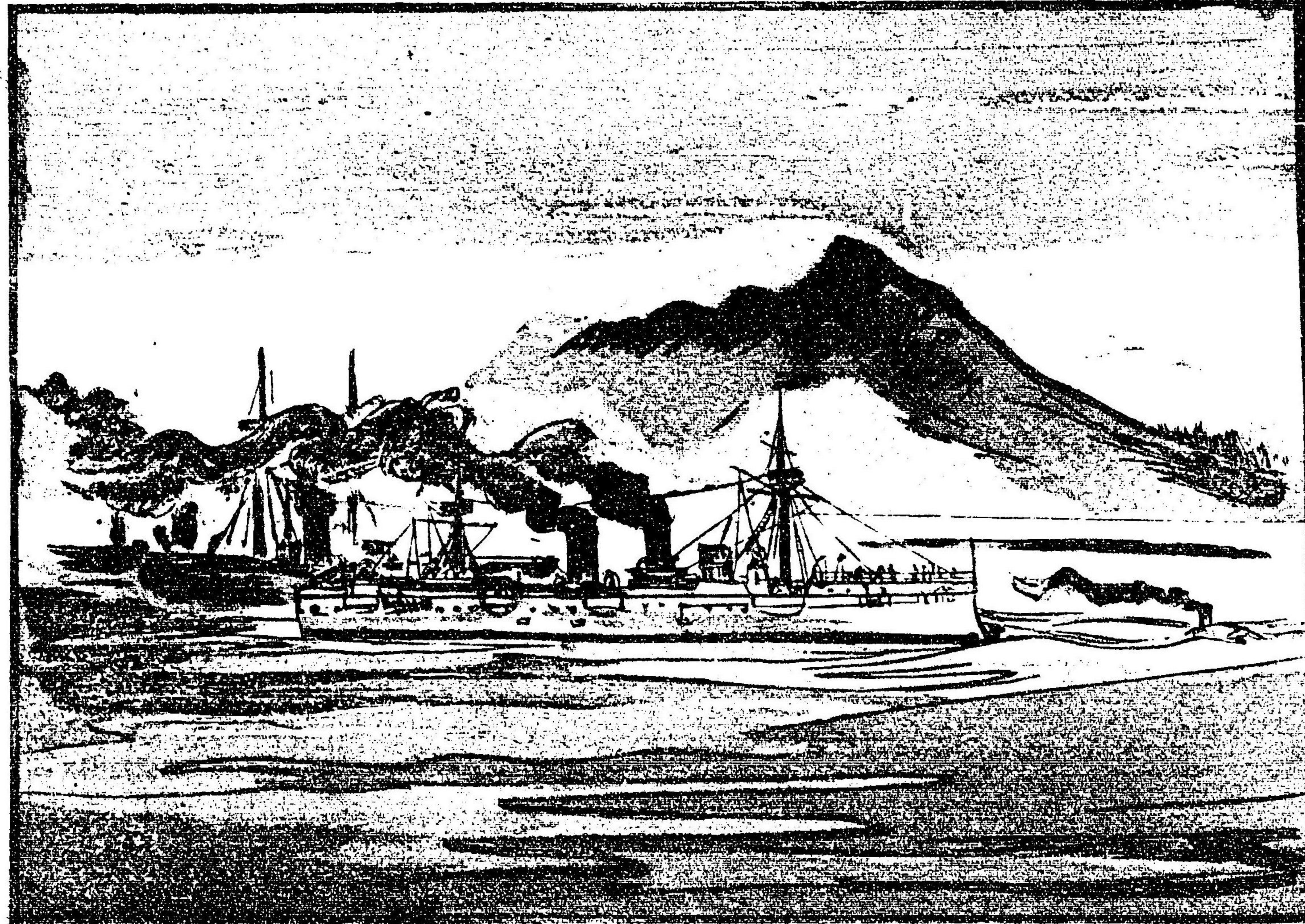
日清戰鬪畫報





宣統元年
正月
全議

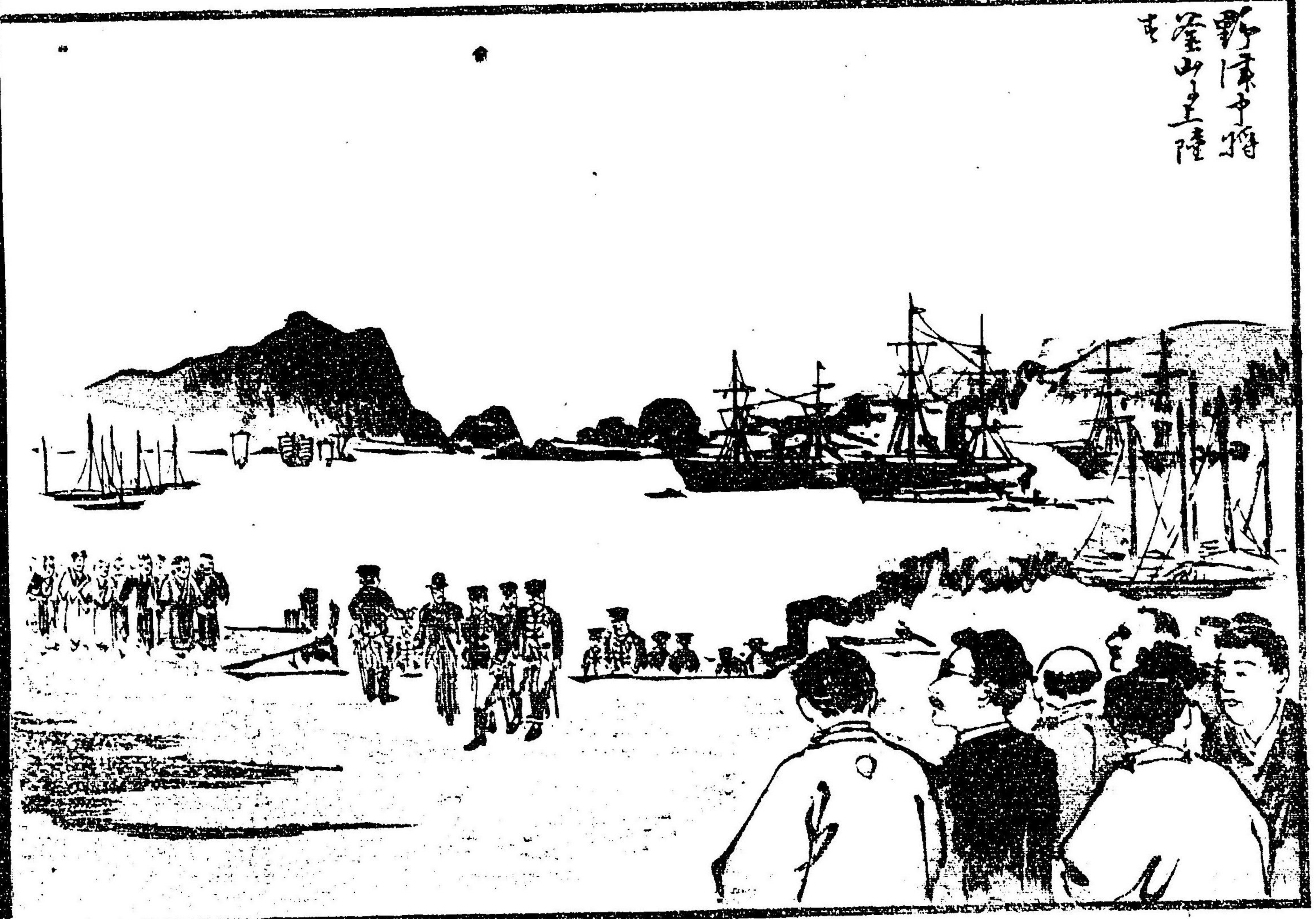


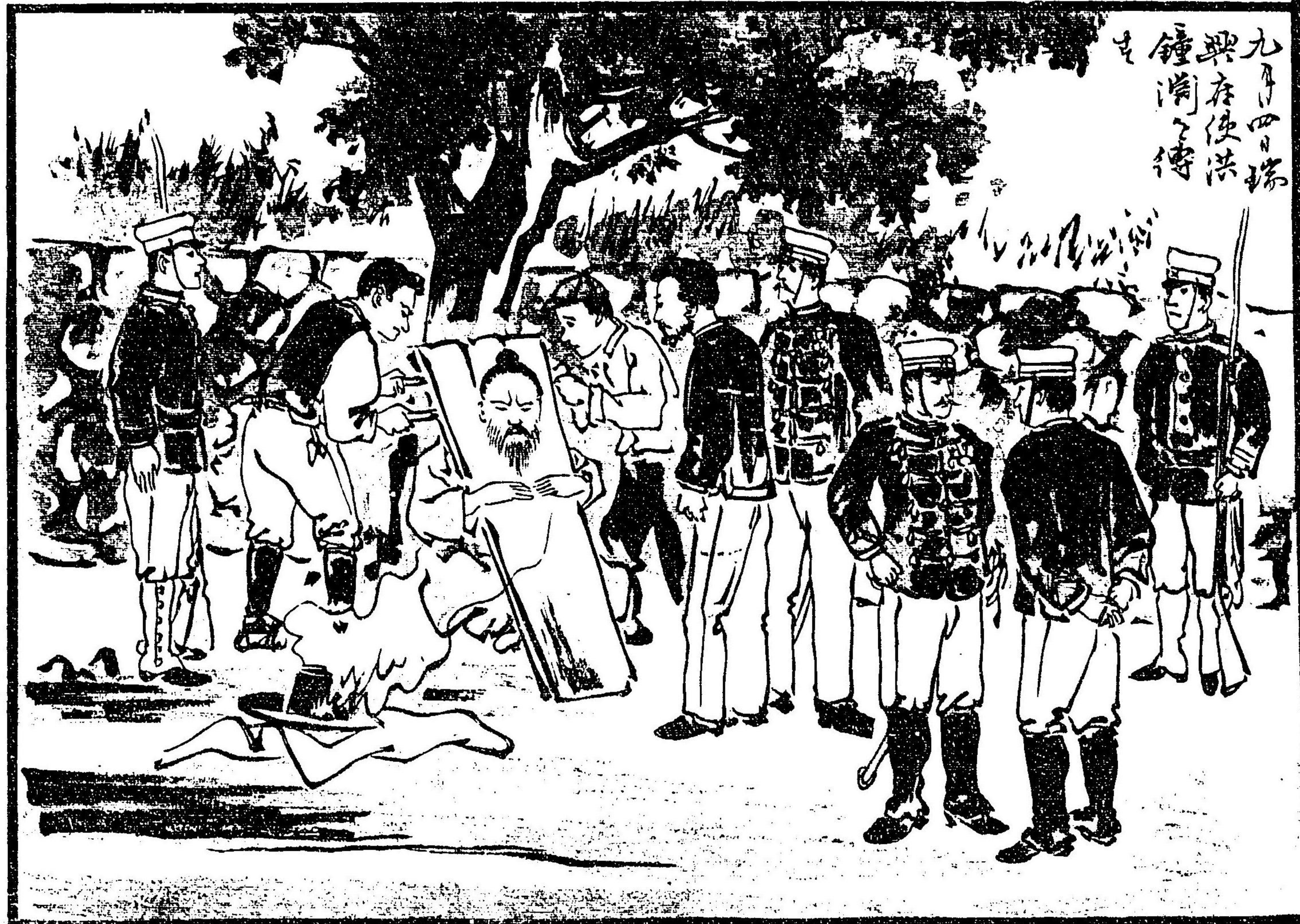


牙山の敗
将葉志起
平壤より向
て潜行す



野原中將
釜山に上陸す





九月四日
興在使洪
鐘滿之傳



青石關
錢清境界

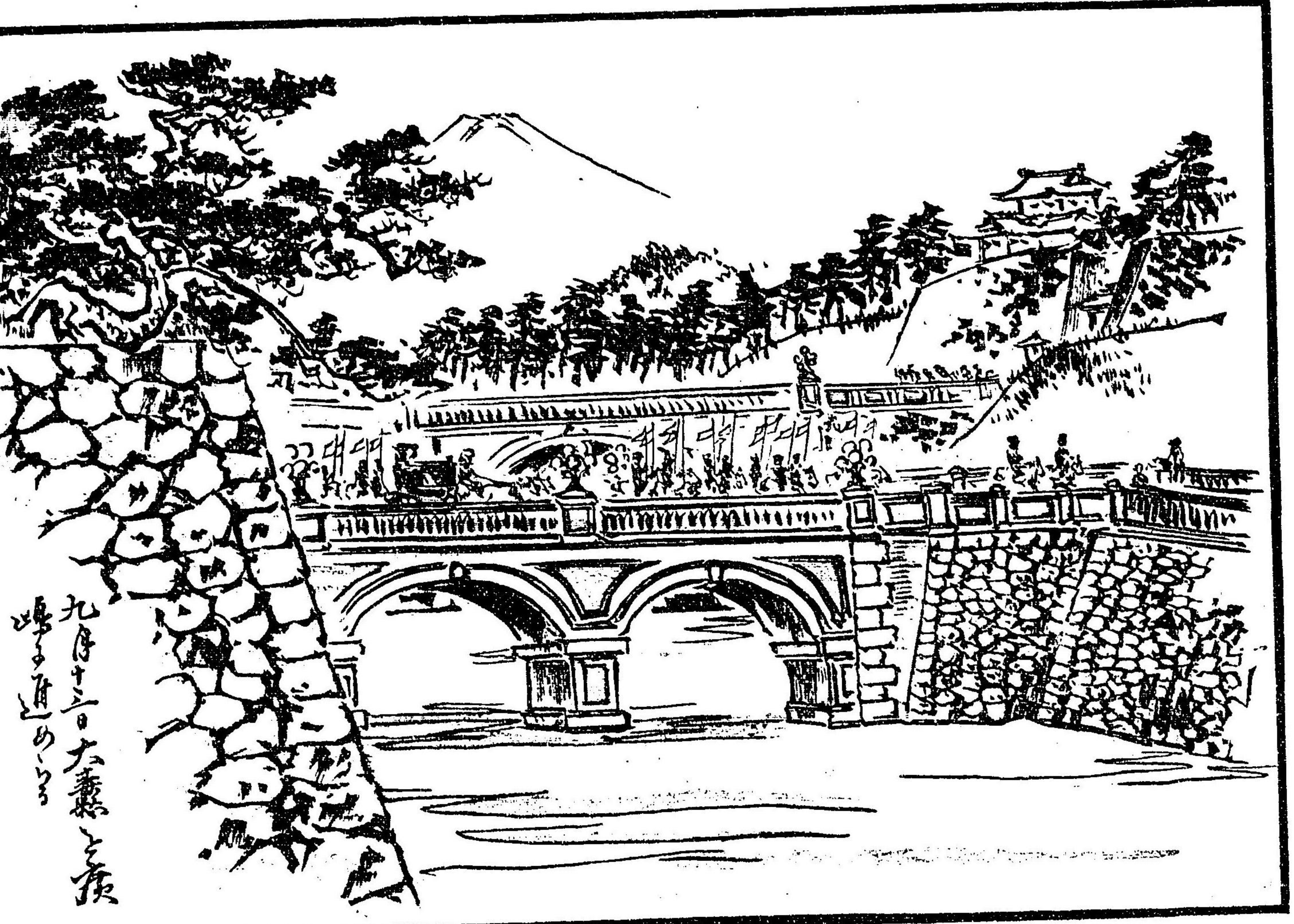
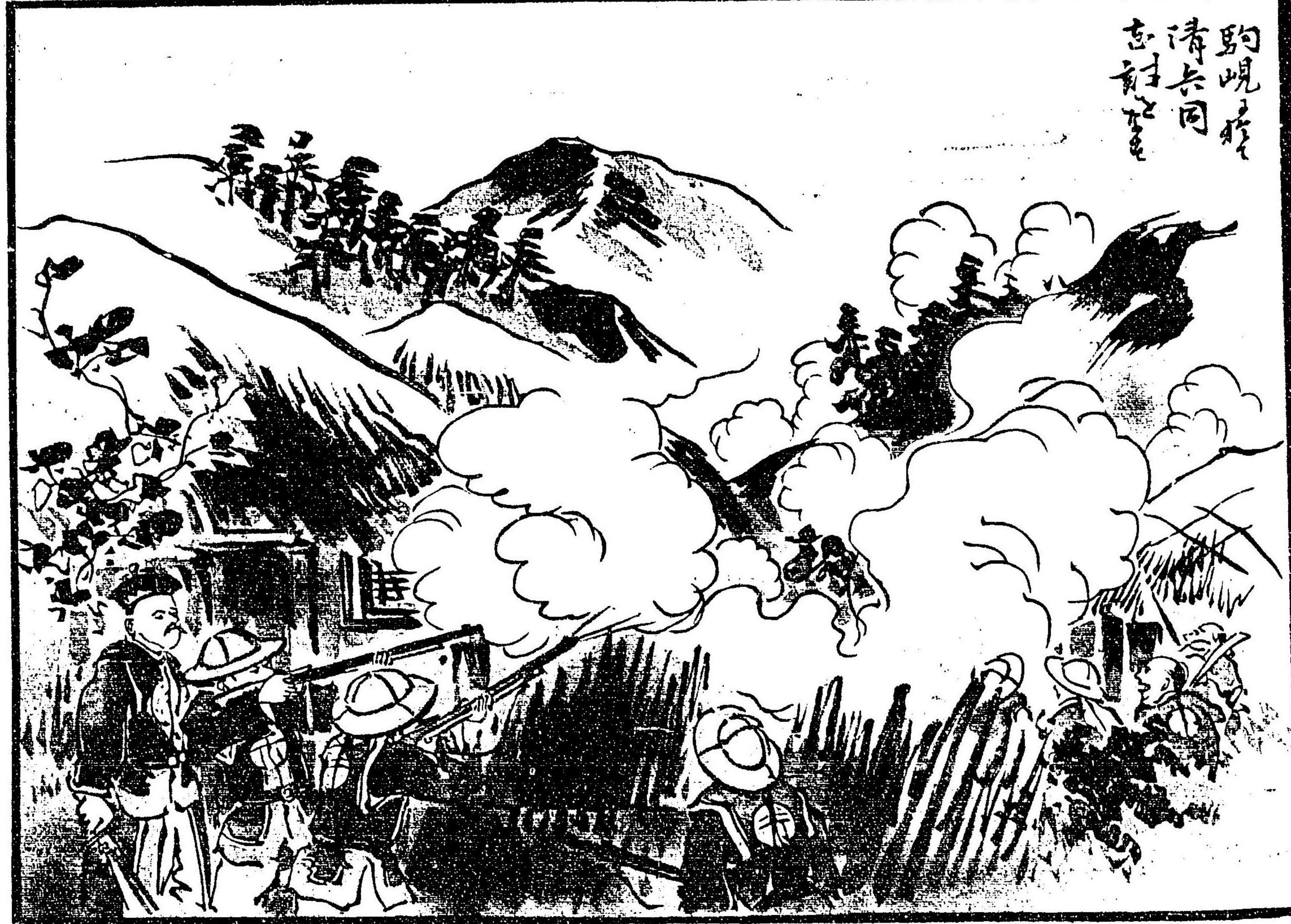
我年黃
州城
右領



瑞興府
夜盤



駒峴
清兵同
志新



九月十二日大霧と夜
鳴子道あり



作使騎各東
瑞林手軍身
敵の四騎、皆
討つて退く

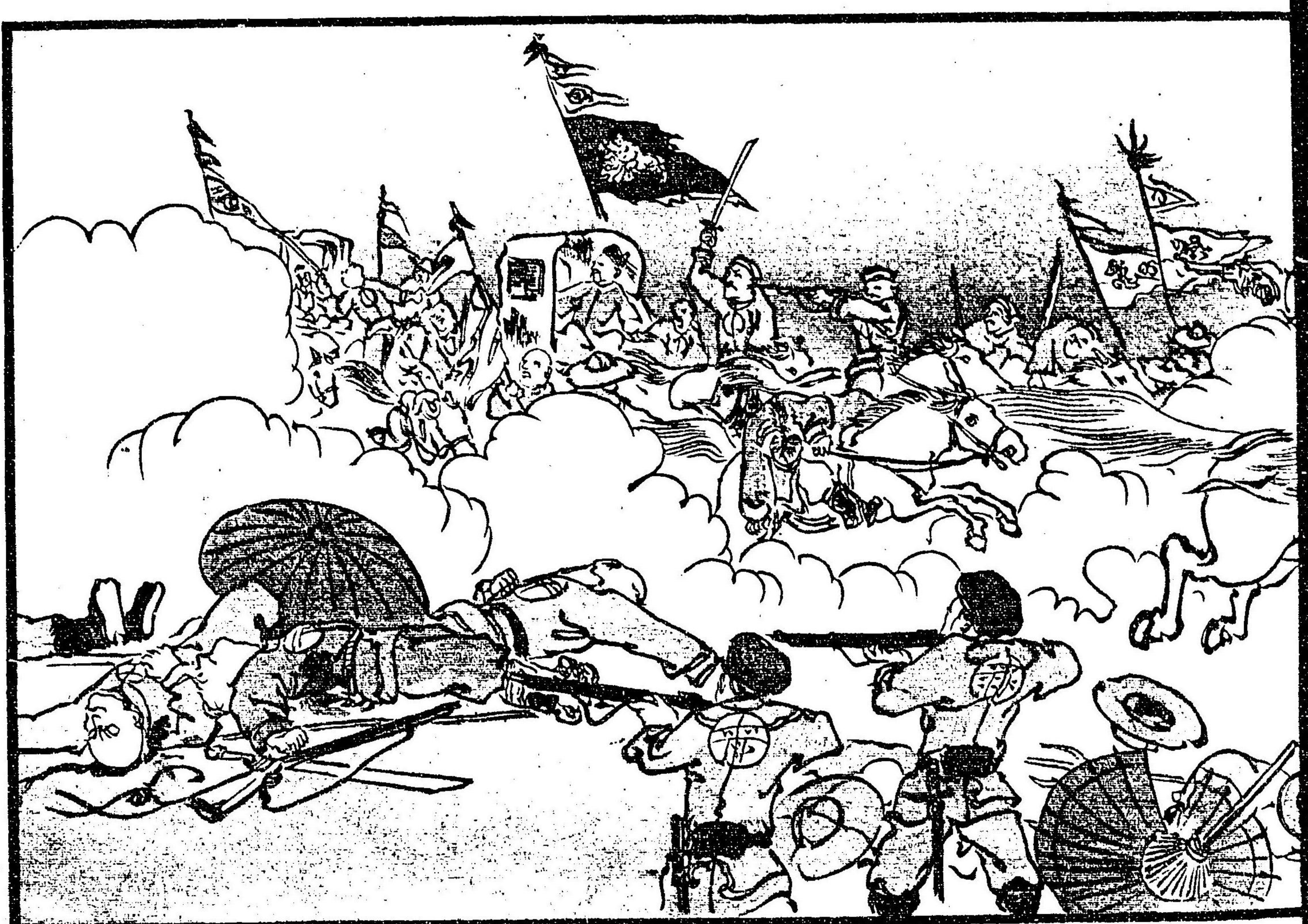
明徳正五年
九月十五日
午前四時迄
我軍敵の四
面を圍ふ事
壞之致す



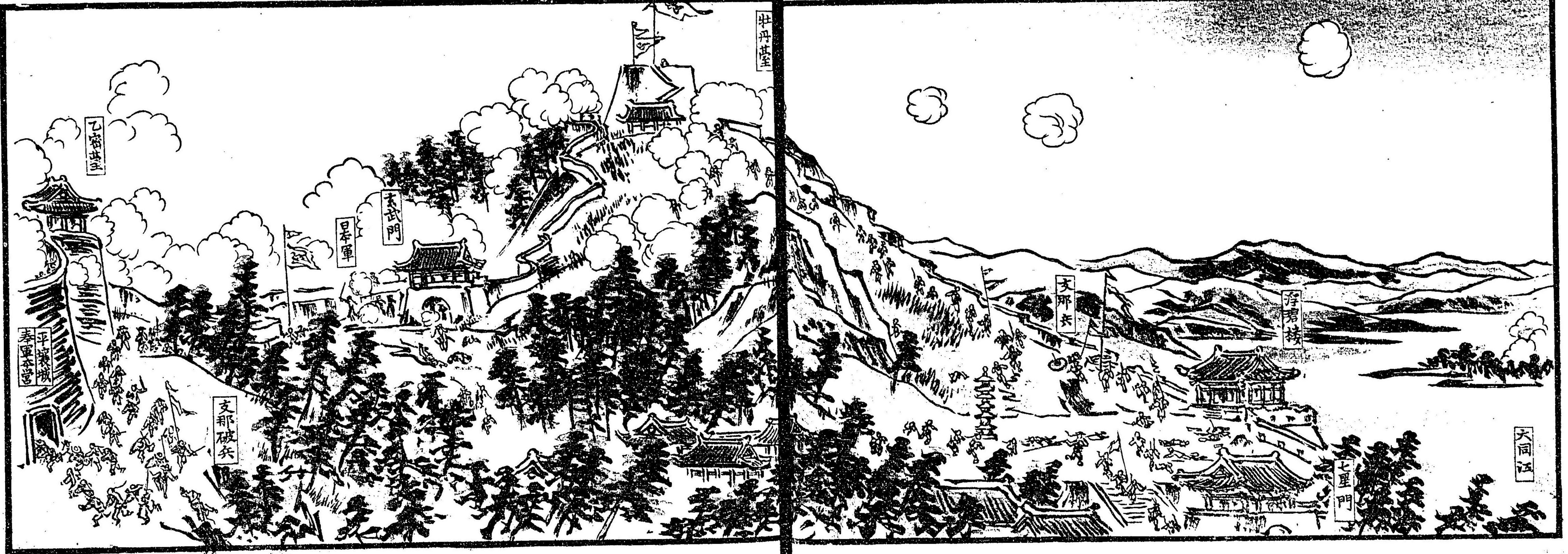


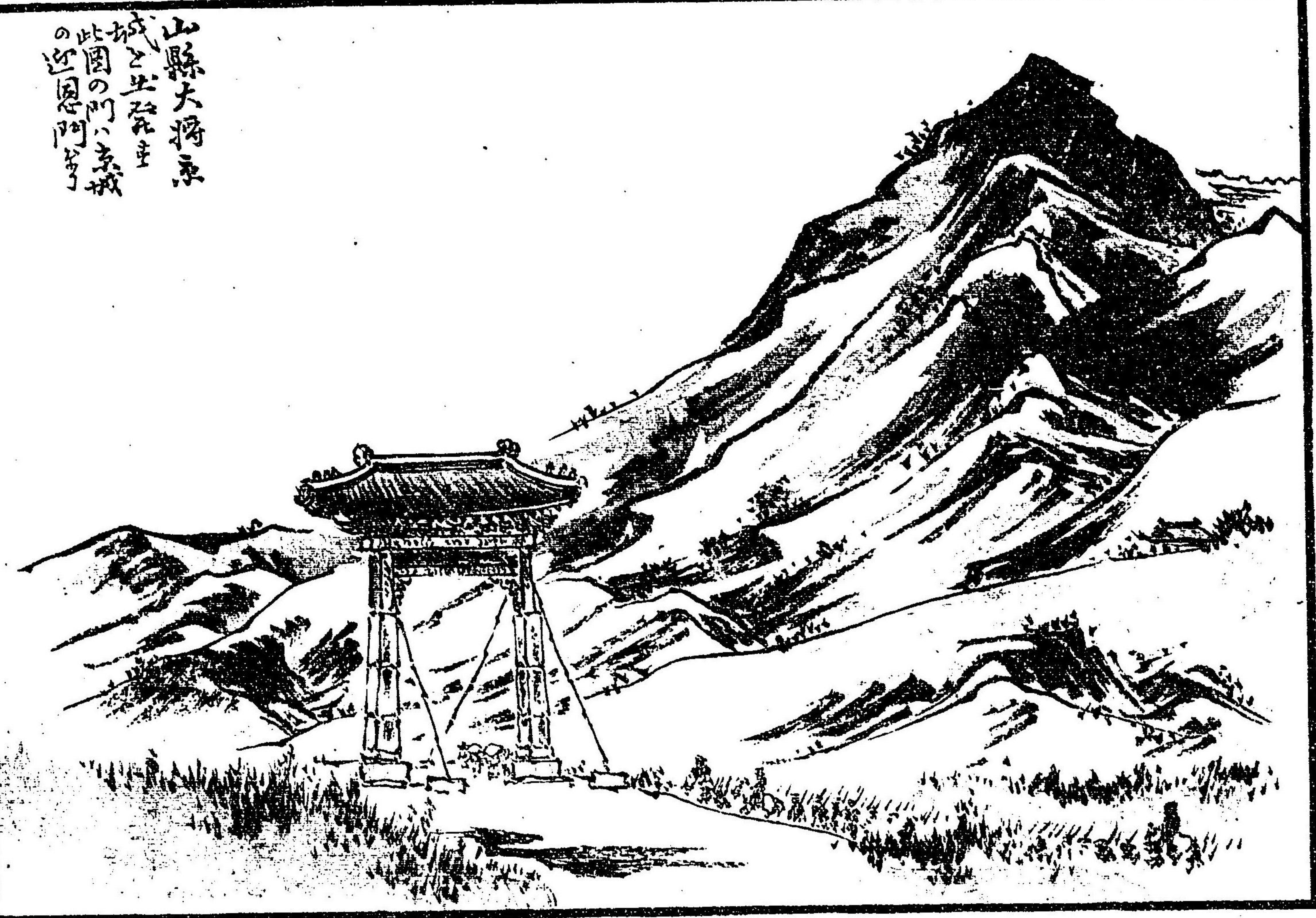
激戰
船橋里

大通縣成國軍滿州隊慶市



湖寧の激闘
 特許堂
 八平城
 の牙城
 軍臺
 上二天
 旗と楯
 けは全
 軍之信
 號とま
 ちの用
 とし
 たりし





山縣大將
城と生きたま
此國の門は京城
の迎恩門なり

妖雲轉天に來り日清の交渉談判も纏まらず事態漸く難に至らんと
 し世の中何となく騒ぎ出したる折柄七月十六日の夜に入りて警電
 は上海より我參謀本部に來れり曰く
 清國は十五日陸兵一千五百餘名を朝鮮に向けて發せしめたり
 此警報に接するや十七日には早朝に參謀本部より急使にて伊藤總
 理陸奥外務西郷海軍榎本農商務の各大臣及山縣樞密院議長の邸へ
 報じ午前九時より有栖川小松宮兩大將を始め奉り大山西郷樺山榎
 本川上等の各將校其他數氏には宮中に伺候して 御前大圖議を開
 かせられ樺山中將を現役に復して海軍軍令部長とす樺山中將は此
 拜命あると直ぐ佐世保に向はれたり
 それより日を経て七月廿九日には朝鮮の日本軍兵は成歡を攻め落
 し其足にて壘る三十日にい全く牙山を占領したりければ支那兵と
 もは皆韓人の家に入りて其衣箱を奪ひ身を朝鮮人にやつして逃れ
 清將葉志超等の如きも婦人の衣を着し山間の迂路をたどりて平壤
 に落行きければ成歡より平壤に赴く數里か間の朝鮮人は大襦袢を
 奪はれ赤裸となれる者多かりしとぞ
 之より後數日を経て八月十日の拂曉殘月既に海に沈み烟波高く天
 を掩ひ四顧晦冥の時を計り大小の軍艦凡そ二十艘は二隊に分れ威
 海衛に押し寄せたり此の威海衛と云ふは支那山東省の砲臺にて盛
 京省の砲臺なる旅順口と相對して渤海の口を扼する所なり我海
 軍は此處に押し寄せて其砲臺を攻め天晴れ敵の艦隊を徹底にせん
 としたるに敵艦は此處に非ざるにや一向に出で逢はず唯一二艘の
 港内に深く入りて遙かに砲發するのみなれば此日の午前第八時と
 いふに我艦隊は砲撃を中止して引上げたり是より先き我艦隊の威
 海衛に押し寄するを聞くや英國の軍艦二隻は其の海軍の形勢を見
 んと思ひてか將た他に考へありてか全速力にて我艦隊に前後し
 て進行し且つ電氣燈を點じて海上を照らし砲臺を放ちたり杯して

兎角我總隊のために不都合なりしは如何にも残念なる次第にこそある

茲に話頭轉じて我陸軍の一たび成敗牙山を攻め落してより最早順の憂なければこの度は平壤の敵を征伐し進んで支那の北京を陥れんどの廟算を定め大軍北に向ひ八月八日と云ふに一戸少佐等は先づ京城を出發し引き續いて其他の諸隊もみな義州街道とこそは進行したり此頃の炎天は頭上燦くが如く脚下の砂礫も皆灼け特に宿驛には兵糧の覓むべき所もなきに五十餘里の長途を直指して進みぬる我軍隊の決心の程こそ勇ましくとて取せしけれ斯くて先づ第一日目には淡霞半ば北岳を包み曉風行々征衣を吹きて泥岬より小白洞を過ぎ西大門を出で暮華閣を越へて西に進みたるに道傍の村家王命によりて道路を掃き水を番き我軍を待たりけるぞ盛らしき此日は高陽郡と云ふ所にて一泊し翌れば九日の朝我軍は鶏鳴と共に高陽を出で佛城と東谷との間なる粟加を睥めながら坡州と云ふ所につきて一泊したりそれより長湍府に向ひけるが北に行くこと二里計りにして臨津江を渡り凡そ一甲計りにして長湍府に宿し翌日此處を出で山水明細の間を過ぎ京城を出發してより日暮れば凡そ四日目と云ふに開城府にぞ着きたりける

我軍まばらく開城府に止まりける間に一戸少佐其外の先遣隊は早くも瑞興平山の間に進みて頻りに平壤の清兵を誘ひしも清兵匪に出で來ることなければ斥候兵を深く敵地に入らしめて清兵の様子を探ぐらしめたるに此斥候等は韓人の妨害に逢ふて確實なる清兵の動靜を知る能はずされども先遣隊は如何にもして敵情を探ぐり且つは敵を開城附近に引き付けんと力めたれども未だ清兵の一人だも出で來らざりければ八月廿日より二十一日の拂曉にかけて先遣隊は趙秀の本營南川女岩の各營もみな金川に退却し二十二日には金川より開城府に還りけり又清兵も一時黃州より瑞興に向て進

行するの模様なりしは一戸少佐の退却せし頃より退き退きて平壤を守りければ我軍もし平壤に入らざれば軍は始まらざるべくぞ見えたりける
却説該後に還りて八月一日には宣戰の大詔もあり之れと同時に清國も亦宣戰書を公にし大に我國と戦ふの意を明にしたりければ我國も亦大に兵を出すことに決し先づ第五師團長野津中將は八月中旬に大兵を率ひて海を渡りて釜山に上陸し八月十九日といふに陸路京城に入り大島少將は旅團の兵を率きて二十四日に龍山を發し野津中將も亦將さに全軍を指揮して北進せんとしたれば日清兩軍の血を闘ひも間近くなりぬと知られたり

かくて八月廿四日より二十五日にかけて我兵は續て開城府に集りけるか二十六日一戸少佐は前衛として再び北進し二十八日の拂曉大軍擧つて北進の路に着けり先づ此日の午前三時五十分廿一聯隊の一大隊前衛として出立し次いで午前五時に二十一聯隊十一聯隊は本隊を作りて出發せしが此時大雨山を沒し曠々濼々として村々も見分けがたく散々たる雷聲は天に轟き閃々たる電光は地を劈きけれども我軍隊は列を亂さず進み行ける次で騎兵大隊砲兵大隊衛生隊最後に昨日新來したる一中隊隊となりて兵線凡そ三里に涉りければ路傍の韓人等はみな舌を巻いて驚愕せしも強ち無理おらず此夜は全軍金川にて宿れり此開城府より金川に至るまでの道程は山脈左右に分れて長く走り街路溪下にあり行くこと一里にして青石洞に出て又一里にして青石館あり山脈茲に盡きて山勢俄かに峻はしく峻嶺犬牙相接して一路を開き茲に青石關と云ふ關門あり之より一里半にして餅店里に至るまでは山勢高峻なるが餅店里よりは左右の山脈又平行し此處より三里計りにして金川に達するなり

翌くれば八月廿九日金川を發して平山に向はんとせしに折柄猪臨

河の水溢れて架橋落ちたりければ全軍暫く玉女峯山腹に營を張りてその減水を待ち三十一日に至て出立し平山に若したりかくて九月一日となりしに立見少將は湖寧の支線に向はんとて平山に立寄り直ちに南川店に向ひ九月二日立見少將は朔寧線に向つて出發したり翌くれば九月の三日旅團は平山を發して葱秀に若したり此地は東西に高山あり一河溪を沿ふて流る山腹河岸すべて我軍ならぬはなく夜に入れば各營悉く火を揚げたり折柄四日の眉月繼く山の端に傾き秋風颯として霧野の七草に置く露を拂ひ虫の聲響として轉た戎衣を冷ならしめ武士は戰取りて早晚屍を照すべきの月に向ひ將軍は幕に坐して前程の地形を語れり是より先き我軍は大舉して北進するに及び一戸少佐は前驅として先づ發し途上徵發の事に従ひ沿道の人民にみゑ力の及ぶ限りこれに應じたるも獨り瑞興府使は種々の口實を並べて應せざるのみならず却て遠く隱蔽せしめたりとざるが故に旅團本部の瑞興に着するや長岡參謀長は府使を大に詰問せんとする打柄恰も好し府使洪鍾淵は何氣なき體にて大島少將を本部に訪ひ大に阿諛の辭を呈す長岡參謀長は直ちに其席に於て日來の行爲を詰問せしに其答曖昧なりしが吏房は悉く府使の秘密を吐きたるか故に參謀長は大喝一聲直ちに兵士に命じて洪鍾淵を縛せしめ首枷を加へ獄に下し此旨を在京の大島公使に電報し韓廷に對して罪人受取の使者を發することを申遣りたりかくて九月六日の未明一戸少佐は前衛の一大隊を率ひ黃州に向て行進せしに前面より奉軍營の騎兵二十騎許清軍の斥候として來りければ我軍は直ちに之を撃ち其場に敵の一騎を仆したり我軍は益々進みて敵を追撃したりけるが黃州の城門に入らむとする時又もや韓兵は壁門より一齊に砲を放ちたり我兵なにかは遅々すべき一令の下に各々銃口を揃へ萬雷の一時に落ち懸るが如くに射撃すれば敵も亦必死に應戰するも如何で抗すべき城内の敵兵は散々にな

りて城外へ走し城中亦一人も抗敵する者なければ我軍は一兵を損するなく黃州城に入るを得た時に午前八時三十分にして平壤攻撃の第一段は勝利を以て始まりけり黃州已に我手に入りたれば翌くる七日には旅團の本隊及び砲兵騎兵衛生隊ことごとく黃州に入りて瑞興より來るべき野津中將の率ふる師團の到着を待ち合はせ大迫少將の率ふる元山の兵及び立見少將の率ふる朔寧枝隊の兵と氣脈を相通じ愈よ平壤大攻撃に取かゝらんと構へけり野津中將は九月八日といふに瑞興より鳳山に向ひけるがこの中將は何時も月毛の駒に打跨りて自ら最先に進み之に従ふ將士は中將の後より順次に進み若干の兵士此一行の前後を護りたる様古の九郎冠者が氣象をも思ひやられて勇々しくも見わたりける扱我軍の方畧すでに定まりて大島立見大迫の諸將は三面より平壤に攻め入らむとの準備に取りかゝりけるかくて愈々九月十五日は來にけり元山枝隊の前衛佐藤大佐は歩兵第十八聯隊騎兵一小隊砲兵一大隊及び衛生隊を率ひて成川より進み立見少將は朔寧枝隊の第十二聯隊の一大隊第廿一聯隊の一大隊と騎兵一分隊とを率ひて麥田店より進み大島少將は第十一聯隊第廿一聯隊騎兵一中隊衛生隊野戰病院を率ひて黃州より進み三面の大軍勢虎の如く平壤にこそ攻め入りけれ此の日野津中將は先づ師團兵を二つに分ち第一行進團體は歩兵第二十二聯隊砲兵第二大隊を以て組織し柴田砲兵中佐之を率ひ第二行進團體は歩兵第十三聯隊騎兵第五大隊本部及第二中隊砲兵第一大隊工兵第五大隊を以て組織し友安歩兵中佐これを率ひ一隊をば元山枝隊に聯絡せしめ中將自ら大軍を引率して月毛の駒勇しく鞭ちつゝ大同江の下流に着き我海軍の力を借りて兵を渡さんどせしが此日の進行甚だ迅速にして我海軍未だ至らざりければ中將は上流銀島のあたりにて得たる粗造の船を浮べ全軍を下知して之を渡

らしめ猛烈なる突貫をなして數個所の敵壘を抜き本軍を二分して
一は平壤城の西北面より敵の背後を衝き他は側面より急進して平
壤の西部を圍みたり此の間に立見少將の勦軍枝隊佐藤大佐の元山
枝隊は平壤の東方より一望廣濶なる原野に出で疾風の如くに馳せ
て敵の左翼を敗りて夥多の敵壘を抜き平壤の側面を圍み又大島少
將は中和の道より進んで敵の正面を攻め吶喊天を動かし砲聲地に
轟き屍は積んで山の如く血は流れて泉の如く大同江の水も爲に紅
ならんと欲し平 野も天然ならぬ岡を築けり
翌くれば十六日の拂曉我軍は吶喊を作りて攻めたてけるが中にも
大島少將は固より眼中に一敵なく我等一手にて平壤一掃だけは引
受け申されたる程の勇將なれば其勢甚だ熾にして我將士の死傷も
頗る多く少將も流丸のためにカスリ傷を負ひたれども少將は少
しも屈せず尙も兵を下知して軍を進めけるに彈藥全く缺乏して兵
站部の供給線は遙かに後方に隔たり猛勇の少將も今は如何ともす
る能はずして一と先づ攻撃を中止したり此間に各方面の戦況はま
すく勝利を得て進軍の喇叭囂々として響き野津中將は最先に
進んで天軍潮の如く平壤城内に入りたりければ敵の大將左實貴は
逃げんとするも逃ぐる路なく終に我軍の爲に命を失ひ其他敵兵の
死傷數を知らず生擒につきたるものも頗る夥しく此日の未明に平
壤全く陥りて午前八時といふに四面の我軍皆城内に集まり來り一
度に凱歌は唱へたるは目出度かりける
話後に還りて我兵の龍山を發して平壤に向はんとするや先づ斥候
騎兵を派して敵の様子を探らしむ乃ち斥候兵は八月二日大同江を
渡りて中和に達し此處に其本部を置き一府郡毎に傳騎を遣きて偵
察に力を盡したりけるが中にも實に勇ましかりけるは襄陽洞にて
敵の四騎と戰ひたる東端一等卒なり此の東端は脚氣にて馬を取す
るに自由ならず誤て落馬したりしかば馬を捨て、敵の四騎と戰ふ

て一人の腿を斬り一人の馬を斬り尙ほも刃の續く限り斬立てけれ
ば敵は遂に支えずして退きたり東端も苦戦したるため右腿を打ぬ
かれ左手にて敵將の刀身を握りて斬りしたため指を傷け面部に刀傷
を受けたれども更に屈する色なく百米突が程は劍と刀を杖に
して歩み返へりしと云ふ嗚呼勇しき極にこそ
さても平壤は我軍四面より攻寄せて乗取りたりしが其中の尤も激
戦なりしは大島少將の向ひたる船橋里なり乃ち此少將の率ふる旅
團の特別方略と云ふは右翼中央左翼獨立の四隊に部署し右翼は西
島中佐これを指揮し中央は武田中佐左翼は奥山少佐指揮し右翼隊
は十五日午前四時に出立して船橋里の東に向ひ行進すべく中央隊
は全三時に覆し左翼隊は水障橋より大同江を渡りて敵の左翼に出
つべしと定またり
陰曆中秋の月は銅鏡の如く蒼茫たる大野は秋の七草を添へて月波
を浮べたる九月十五日の拂曉寂々たる古都の對岸に轟然たる一發
の砲射を開けりこれ午前四時に其營地を發したる右翼隊が船橋里
の田畝を徐行し黍畝の間を過ぎて正さに敵の第一砲壘に迫りたる
なりこの時午前三時に出立したる中央隊も亦側面より均しく一齊
射撃を以て敵の第一壘と第二壘に向て進撃したり我軍已に砲射を
始められたれば敵軍は直ちに激烈の砲射を以て之に應じ殊に大同江
の砲壘よりは尤も猛烈の勢にて我兩隊に向て野砲の砲射を始めけ
れば敵味方の砲聲は山野を破る如く砲火は紫電を飛ばし東西南北
殆んど二十餘分時間は刹那の斷へ間なかりけりかくて午前四時四
十分頃となりけるに我進軍の喇叭ひびき渡りて吶喊の聲大に起り
右翼隊は疾風の勢もて敵壘に押し寄せたれば敵は遂に第三壘に向
て逃込みたりこの時中央隊も側面より次第に進撃して碑石洞の小
森林に至り前衛の撤兵線を廣めて右翼と連絡せしめんと更に兵を
前衛に増して森林家屋の間に進みけるに敵は左翼に向て進みたり

と聞きければ中央隊は豫備隊をやりて左翼に加たり砲聲はますます激しく敵丸一發西島中佐の傍に落ちて破片中佐が左額を掠めたれども中佐は更に屈せず大に進み終に我右翼は敵の第一壘を占領しつつ第二壘をも占領して更に第三壘に向て攻め寄せたりされども堅固宏壯にして外に溝を造り連發銃を以て速射すると甚急なれば我軍即坐に死するもの多し中央隊の森少佐は十一聯隊の第三第四中隊を率ゐて敵の第三壘に迫らんとしけれども地の利を占めて激射自由なる敵軍は我兵をして近寄らしめず少佐も攻めあぐんで見えけるが此時十一聯隊の第一中隊長町田大尉は十四名の兵を率ゐ真一文字に第一壘を越へて第二壘に至り敵營を目がけて攻寄らんとせしに丸忽ち其股を貫き次に肩に中しついで胸を洞したりければ地上に倒れ見る間に下士も倒れ兵士も倒れて其手に残るものは軍曹山下某と兵卒二名のみとぞなつたりけるかくて東の方は白み渡り午前六時過ぎとなりしに輕騎六隻飛ぶが如くに大同江を打ち渡りたり之を見て敵兵は頼りに小銃を亂發したれども舟は猛進し敵の右翼に向て吶喊して攻め入りたり是れ奥山中佐が率ひたる右翼二中隊にして師團と連絡を通じて攻進みたるなり此時清兵は大に羊角島の人家を焼き拂ひければ煙長く蔓こり深江の長廣舌の如く天を延ぶつて凄まじく午前十時を過る頃には火は二ヶ所となり午を過ぎて後は三十餘個所に廣かりければ左翼の砲隊が水灣橋の西北十器站の北に於て敵壘に放ちかけたる砲撃も烟は風のままに敵壘を掩ひたるために射點さだかに見わけがたく加之我右翼の苦戦ますます甚しければ奥山中佐等は僅に二個中隊の兵を以て如何とすべき様もなく遂に土器站附近に退きたり此朝六時三十分頃よりして牡丹台北の溪に向つて我散彈の注下する様殆んど雷の下るが如く牡丹台を越へて山と山との間の砲聲はこだまに響きて凄まじかりしは朔寧元山の我兵が攻寄せた

るものと覺しく平壤の支那兵が狼狽して牡丹台より西方に移軍するもの騎兵の山より下るものなどあるは今しも野津中將が向ひたると知られたり斯かれば敵は最早怖氣たちたりとは見ゆれども大島旅團の攻撃鋭きため逃ぐれば礮にせられんことを危ふみたゞ殊死して戦はんと決心したるもの、如く船橋里の戦は毫も衰へず敵は却て一大隊許の兵を増したりければ一戸少佐は其豫備隊を率ひて碑石洞より船橋里の東南に於て更に進撃を始め攻めてもくも船橋里の敵は弱りたる氣色もなければ或は七八名を率ゐ挺身して迫るものあり或は刀を抜いて斬り込まんとするものあり諸將自ら兵の先頭に立て叱咤督戦尤も勉めたり斯る激戦の中にも大島少將は豫備隊の前頭にありて激戦の模様を視察し居りしに一丸忽ちその胸部を掠めて微傷を負はしめ彈丸は側面にありたる通辨人を殺したりけるさて我右翼の砲隊は敵の第四壘の東面四百メートルの位地に在りて盛に砲射をなしたりしが其邊一帶の黍畑にして適當の陣地なく徒らに敵の銃撃を受くること多ければ午前十時頃より退いて後方の高丘より斷へ間なく發砲したれども此よりの對岸の敵壘までは二千メートル以上の距離にして殊に羊角島の火の手はますます前面を黒くしたれば我砲の効力は若しからず敵兵は船橋を渡りて生兵を送り彈藥を支給するものなれば此船橋を破壊せんとしたれども能はざりけりかくて午後二時二十分頃に至りて羊角島大火の烟と今曉のより砲聲とは空を呼んで大雨となり電聲大に鳴り砲聲も一時雨底に沈み去りて平壤一帯の山河は迷暗として定かならず暫くして大島少將は各隊に向て退却を命じ三時頃よりこれが準備をなしたりける敵壘に充満せる清兵之を見るや始めて逃げ路を得たる如く河橋を横ぎり平壤内へ退く折柄大雨ますます甚しく羊角島より次第々々

却説立見少將の率ふる前軍隊は十五日の午前零時に國主峴の營地を出で萬馬嶺として合井江を渡り兵を牡丹臺の背後なる敵の堡壘を距る三百メートルの地點に押し寄せたれども敵の未だ知らざりしこそ迂濶なれ此處にて隊列を布き一時に攻撃を始めたるに敵の左右兩堡より應戦して甚だ勉むモーセルの十三發連射に隙間もあらず撃出しければ我軍分れて三隊となり一は山口少佐右翼に將とし富田少佐中堅に當り一は立見少將自ら左翼に向ひ更に一隊を分ちて桂大尉に左進せしめ第一壘に突入せしめたり此より砲兵の第二中隊は野砲を放ちて榴散彈を飛ばし富田少佐の攻口を助けしかば遂に突進して第三壘を乗取りたり

之れより元山朔寧兩枝隊は合して銃鋒を牡丹臺に集め三面一齊に進みて迫り二發の榴彈を以て胸壁を粉碎しその力と頼みたるガットリング砲を廢物になし終りければ山口少佐は之に力を得て兵を下知し奮進し難なく牡丹臺の外城を陥れける之を見て富田少佐も後ればせじと玄武門に突いて入りけるに敵も中々手づよくして泥土を以て門口を塞ぎ死守したりければ富田少佐は三たび進みて三たび退き攻めあぐんで見えたりける砲兵隊は之を見て又砲口を此方に向け玄武門の城樓に向て砲丸雨の如くに打ち出したれば瓦はグワッ／＼と落ち散り胸壁は忽ち敗れたり其中に一勇七の門牆を躍り越えて廓内に入り内より開門して我兵を導きたれば勢に乘じて平壤の城廓に迫りしも敵は死戦して防きたれば一先づ總軍を纏めて休戦の令を下しぬ時に午後二時過なりき

さる程に野津中將は十四日の未明に新興洞を發して平壤に向ひ十五日の朝山川洞に達してこれより平壤に一里餘といふに各方面の戦は眞最中にして硝煙天を掩ひ砲聲地に響き平壤一圓は大修羅道と化したりぬかくて中將は砲列を布きて敵の壘に砲撃を始めしめ歩兵の一隊は黍畑の中を進んで敵壘に迫りヨツタルマツの高地を

占領しそれこれする中に朝霧全く晴れ渡れば平壤の内外鮮かに見え來りけるか忽ち見る一隊の敵騎川を亂して我方に進み來りければ兩軍の目は齊しく此騎兵の上に注ぎ今まで嚙舌なりし砲聲も俄かに静まり只敵兵の無調子なる吠喇の聲の頻りに耳に響くのみ

健氣にも此騎兵大凡百七十餘騎白馬を揃へ眞一文字に砲兵陣地を布ける山脈とヨツタルマツの高地との間に向つて突進し來りかくと見てヨツタルマツに進み掛けし二十二聯隊の中隊は直に後方を振向き一齊射撃を以て其の數十騎を仆せり殘る騎兵は俯も直進して顧みざりしが恰も此時我十二聯隊の或中隊は聯隊旗を護りて行進の途中なりければ端なく此騎兵と衝突し復も一齊射撃に敵の殘騎を残り少く仆せり敵は尙も兩山の凹所の小路を目掛けて突進しつゝありし時山の木蔭に馬を立てゝ息ひつゝありし我騎兵は此體を見て直ちに馬を馳り立所に十八騎を馬上に刺殺したりかゝる様なるにも係らず敵騎復もや出で來りて突撃を試み再び我兵の沈着なる射撃と我兵の増加は敵の一騎をも歸へざりしは實に氣味のよきとありし

其れはさて措き九月十三日には大藏宮城を出で六龍肅々として廣島に向て發し給ふ

此日天氣麗に風枝を鳴さす千代田の松が枝長なへに緑にして天神地祇も我帝國の萬歳を保護し給ふに似たり頓がて午前七時といふに 大元帥陛下には 皇后陛下御同列にて數多の供奉を従へさせられ正門を出でさせら御順路を同十五分に新橋停車場へ御着せられせらる此時御先着の 皇太子殿下を始め熾仁彰仁の各殿下伊藤總理大臣以下文武の百官孰れも整列奉迎せり此日忠實勇武なる百萬の臣民は謹んで御親征の御首途を祝し奉らんとて味爽東より西より南より北より御道筋に群集し最と靜肅に車駕の來るを待ち奉り 龍顏殊に勇ましく麗はしきを拜し奉ると同時に萬歳を祝し奉

